

恋人の子宮

紀卿

温かな子宮、生臭い羊水。

揺られ、眠り、

僕は君の子になった。

そしてへその緒を通じて、

宿り虫のように

君の養分をむさぼる。

ああ、それが、僕――

醜く、哀れな僕。

僕は君のすべてを知っていた。

ぬめる内膜の感触、

腸がうねる音、心臓の鼓動、

もやに包まれた子宮の闇。

でも、本当は何も知らなかった。

君の顔も、膣も、腹も、

脚も、髪も、乳房も。

僕は何ひとつ知らなかった。

こんな僕は、やっぱり君の子にはなれないよね。

だから、殺してくれ。

潰して、絞って、引きさいて、

僕をぐちゃぐちゃにして、

骨まで、肉まで、魂まで。

へその緒なんていら
ない。
ぬくもりなんて偽りだ。
愛なんて嘘っぱちだ。

僕を潰して、
ぐちゃぐちゃに潰して、
もう一度子宮に戻して、
血と羊水と一緒に、流してくれ。

もう何もいらない。
顔も声も、誰の子でもなくていい。
ただの塊でいい。

君の中の
黒くてぬるい穴に
沈めてくれ。

全部、終わらせて。
君の子宮ごと、僕を終わらせて。